

令和6年度 学力向上指導改善プラン

志手原学校長 小山 恵介

学校教育目標		自ら学ぶ意欲と方法を身につけた心豊かな志手原っ子の育成		4月		2～3月	
推進主体		学力向上委員会		成果となる目標		年度末評価	
学力に関する前年度の状況・経年の課題等				学力向上に向けての重点的な目標 (指標となる数値等)		具体的な行動目標 (成業目標達成のための具体的な手立て等)	
						評値	
学 力 の 状 況	全国学 力・学 習 状 況 調 査 結 果 の 状 況 (国語、 算数・数 学に 関 する 質 問 調 査 の 結 果 も 含 む)	国語	○情報の扱い方に関する問題の正答率が高い傾向にある(知識及び技能面)。 ○話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを中心を捉えることはできている。 △漢字を文の中で正しく使うことに苦手な傾向がある。 △「話すこと・聞くこと」領域と比べ「書くこと・読むこと」に苦手傾向があると考えられる(以下2点)。 △目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけることが難しい。 △文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることが難しい。	○文章を要約する力の向上。 ○根拠を明確にした論述する力の向上。 ○語彙力の向上。 ○話し合い活動などコミュニケーション能力を高める学習の充実。	○実生活の様々な場面に応じて、文章を読み取り理解したことを論理的に書いたり、自分の考えを伝えたり、言葉を適切に活用することができる。 ○教科書の各単元末にある言葉の力を適宜応用し、授業の中で、書いたり、話したりする機会を多く設け、習熟を図っていく。 ○登場人物の相互関係や心情・場面についての変化を読み取ったり、文章を読んで考えたことについて、交流したりする学習活動を学年の発達段階に応じて取り入れていく。 ○学校図書と連携し、学習内容だけにとどめず調べ学習や多読につなげ、学校図書館を活用した学習を進め、文章に触れる機会を増やす。 ○対話的な学びの場を取り入れた授業構成を定着させる(ICTの活用含む)。 ○めあて・課題解決の方法・ふりかえり等のあるノート指導を行う。	○情報の扱い方については、発表の機会を意図的に多く取り入れたり、授業でICTを活用した話し合い活動を取り入れたこと、理解が進んでいる。 ○学校図書館を利用して必要な情報を得るために、調べたり、本を読んだりすることを積極的に取り入れたこと、話の内容を捉え、自分が聞きたいことを中心をとらえることを理解している。 △「話すこと・聞くこと」領域と比べ「書くこと・読むこと」に苦手傾向があると考えられる △漢字の意味を理解し、文章中で正しく使うことが十分にできていない。 △文章と図や表を結び付けて考えたり、必要な情報を見つけ手考えようとしていたりすることに課題がみられる。	B
		算数 数学	○伴って変わる二つの数量について、表から変化の特徴を読み取ることや比例と関係つけて考える問題の正答の割合が高い傾向がある。 △学習領域別に見ると特に「図形」の領域に苦手傾向が見られる。 △「選択式」や「短答式」に比べ、「記述式」が苦手な傾向がある。 △加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりする計算等に苦手が見られる。 △百分率で表された割合について理解が難しい。 △示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わされたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて説明することが苦手である。	○図やグラフなど資料を基に考える力の向上。 ○解答の根拠(式の意味等)を説明する力の向上。 ○各領域における基礎的な計算の定着。	○実生活の様々な場面において数学的な見方・考え方を働かせて問題解決に活かすことができる。 ○目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、根拠を基に筋道を立てて考え、問題解決をする学習を進める。また、問題解決に至る過程を説明する機会を設ける。 ○テスト後には、誤答を解説して直しをさせることで児童一人一人が自分の間違いを認識し、次の機会の誤答を減らすことができるようにする。 ○苦手な領域の計算練習を状況に応じて適宜行う。	○伴って変わる二つの数量については、算数科だけでなく、社会科や理科、総合的な学習の時間など教科横断的に学習を行い、特徴を読み取る技能の定着がみられる。 △図形の領域に苦手傾向がみられる。 △「選択式」や「短答式」に比べ、「記述式」が苦手な傾向がある。 △加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりする計算等に苦手が見られる。 △百分率で表された割合について理解が難しい。 △示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わされたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて説明することが苦手である。	B
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	○どの教科も基礎的な力は付いてきている。 △知識だけでなく、様々な情報や条件から思考する問題には苦手意識を持っている児童も少なくない。	○漢字の使い分けができるようになる。 ○思考力を問われる問題に対して、情報や条件から考える力の向上。	○前の学年までの配当漢字を9割程度理解することができる。 ○学習課題に応じた解決方法を考え、取り組むことができる。	○テストやプリントなどの学習後に誤答を直しをさせることで児童一人一人が自分の間違いを認識できるようにする。 ○国語や算数などの学習課題について、根拠を基に解決方法を考える習慣をつける取り組みをする。	○ドリルやプリント、タブレット学習などを活用し、宿題で基礎基本の計算や漢字の練習を反復学習を行い、定着させる機会を多く設定することが出来ている。 ○国語の単元末にある言葉の力を応用した学習や算数の図や表、式を活用し、問題解決を意識した授業づくりができています。	A
	授業等からうかがえる状況(各教科)	△漢字の習得や書字を丁寧に書くのに、困難を示す子もいる。 △課題を解決するために、粘り強く取り組みることができる児童は多くはない。	○漢字の活用や丁寧な書字などのノート指導。 ○思考力を問われる問題に対して、情報や条件から考える力の向上。	○丁寧な字を書くことを心掛ける児童を増やす。 ○学習課題に応じた解決方法を考え、取り組むことができる。	○ノートや宿題などの字を児童が振り返る機会を設ける。 ○国語や算数などの学習課題について、根拠を基に解決方法を考える習慣をつける取り組みをする。	○宿題の漢字ドリルやノートなどの提出物、授業ノートを定期的に振り返るなど、手立てができています。	A
学 力 向 上 に 関 連 す る 学 習 の 状 況	全国学 力・学 習 状 況 調 査 の 質 問 の 状 況	△読書に対する興味が低いとは言えない。 △算数、英語の興味が低いとは言えない。 ○学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと感じている児童が多い。 ○学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。 ○学習した内容について、分かった点や良く分からなかった点を見直し、次の学習につなげようとしている。 ○生活における規範意識は高い。	○苦手な学習に対する抵抗を少なくする。	○様々な教科で「自分の意見や考え」に自信をもって話すことができる児童を増やす。 ○学習面でのきめ細やかな支援・指導で、「自分」得意なところがある」と自信をもって言うことのできる児童を増やす。	○低学年から少しずつ発達段階に応じた学習に取り組む。 ○算数や国語など様々な教科において、つまづきがある児童の支援に取り組む。	○子ども達が頑張った時に、それを自分達で認めることができるよう教師が声掛けをおこなってきた。 ○困っている児童を助けることをするなど、周りの人のために進んで動く気持ち強い。 ○学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと感じている児童が多い。 ○学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。 ○学習した内容について、自分で考え、分かった点や良く分からなかった点を見直し、次の学習につなげることを意識しようとしている。 ○生活における規範意識は高い。 △学校や家庭で読書を進んでするなど、読書に対する興味が低いとは言えない。 △算数、英語の興味が低いとは言えない。	B
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	○行事(運動会・音楽会)への意欲や達成感が高い ○授業に対して前向きである ○友だちとの関係を大切に考えられている △学校以外で自主的に学習をすすめることは難しい	○家庭学習の手引きの活用。	○家庭学習の手引きを活用して家庭での学習をすすめていくことのできる児童を増やす。	○宿題や自主学習などの家庭での学習を定着するように取り組む。	○各担任から適宜、子どもの学習進度、必要性に応じて宿題を出し、家庭学習の定着を図っている。 △今年度も家庭に手引きを配布し、それに沿った課題を提示することができていたので、引き続き来年度も、児童・保護者への啓発と家庭学習への意識付けをしていかなければならない。教師もその取り組みを大切にしていこうと意識した。	B
授 業 改 善	・主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善 ・ICT機器を効果的に活用(クラウド環境を活かした授業実施等)	○ICT機器等を活用した主体的・対話的な学びになる学習課題(目的)を設定し、友達との交流、自分の活動を振り返る学習等で、気付きがある授業作りを検討している。 ○ICTを活用した授業では、動画、写真、プレゼンテーション、大型テレビなどの活用が多く見られた。中でも「児童が映像で活動を振り返ること」や「自分や仲間の考えをまとめて伝えること」活動が学習に効果的であると感じている。 ○1年生からiPadを活用することで、子どもたちのiPadの操作がスムーズになり、情報の収集・整理・発信ができるなど情報活用能力の高まりも感じている。 ○朝の会や夏休みの課題、学校行事など効果的と考えられる様々な場面でのICT活用が増えている。	○ICTを効果的に活用した授業づくりの推進。 ○情報活用能力の向上。	○課題を解決するために、授業や学校行事等でICT機器を目的に応じて適切に活用することができる。 ○児童が目的に応じたICT機器の活用ができる。	○キーボードの文字入力やインターネットの情報の検索、映像編集等、目的に応じてICT機器を操作できるように、発達段階を考慮しつつ低学年から授業で活用する機会を設ける。 ○学習に効果的なアプリケーションの活用など、各教科の学習課題を達成するために活用できるICT教材を検討し、児童が使えるように指導していく。 ○ICT機器等を活用した主体的・対話的な学習や新たな気付きをもたらす学習課題の検討。	○毎週水曜日の朝学習の時間をICT活用の日と定め、ドリルパークを活用した反復学習やタイピング練習等に取り組むことができた。 ○朝の会のスピーチや授業中の発表などで、動画や写真を用いてわかりやすい伝え方をするなど、様々な場面でのICT活用が増えている。 ○ICTを活用した授業として、動画や写真を使ったり、教科書のQRコードを活用したりできた。 ○高学年では、キーノートやスクラッチ等を活用した発表を行い、情報収集や整理・発信など情報活用能力の高まりを感じた。	B
	校内研究・研究の状況	○児童のプログラミング的思考を育成するために、生活・総合的な学習の時間で様々な魅力ある教材を用いて授業づくりを行っている。 ○ICT機器を活用し、児童の思考が深まり互いにつながり合える授業づくりを行っている。	○プログラミング的思考を育成する。 ○ICT機器を活用し、児童の思考を深める。	○学習課題を達成するために、適切にプログラミング的思考を働かせることができる。 ○児童が目的に応じたICT機器の活用ができる。	○プログラミング的思考を主体的に働かせるために、プログラミングの学習課題(目的)を設定したり、様々な魅力ある教材を活用したりする。 ○ICT機器を効果的に活用する学習課題を設定し、活用する場面を増やす。	○ICT機器を活用した様々な授業実践があり、ICTを有効活用するための学習課題を設定し、取り組むことができた。 ○プログラミング教育の授業が1年～6年まで通して行うことができた。 △個別と協働的な学習のバランスが大切なので、これからも引き続き意識しながら取り組む必要がある。	A
家 庭 ・ 校 種 間 連 携	校内研修の状況	○プログラミング教育等の研修に、外部から講師を招き、授業づくりへの助言を頂いた。	○ICT活用やプログラミング教育の在り方についての研修をする。	○プログラミングやICT機器を活用した授業づくりができる。	○プログラミングやICT機器を活用する授業に取り組む。	○プログラミング的思考を主体的に働かせるために、学習課題(目的)を設定したり、様々な魅力ある教材を活用したりすることができるよう、講師からの助言をもらうことができた。それによって、これからのプログラミング教育の発展に繋がることが期待できる。	A
	家庭・地域等の状況	○学校運営に協力的であり、PTA役員を中心に新しい学校や行事の在り方を考えている。	○行事での地域・保護者との連携協力。 ○子ども、保護者・地域・学校にとってよりよい行事の数や開催の形の検討。	○行事に意欲的に取り組み、達成感を感じることができる。	○行事の回数や内容の検討を行う。 ○子どもたちの日々の練習を評価していく。	○授業参観や学級懇談会等、行事の回数や内容の検討をしながら実施できた。学校だよりや研究通信などを通じて、子ども達の学習の様子や学校での取り組みについて情報発信をしてきた。来年度も、社会の情勢に合わせた形で子ども達の学びや頑張りを様々な方法で発信していきたい。 ○これからも地域との繋がりを大切にしていきたい。	A
小・中における教科連携等の状況	○自然学校は小野・母子・志手原、修学旅行は小野・志手原で合同実施し、上野台中学校区で連携して行事を行った。 ○上野台中校区の6年生で中学校に向けての事前交流会を行った。	○学力向上に向けた小・小、小中連携。	○上野台中学校区との交流を実施する。 ○中学校との連携を図っていく。	○児童・生徒の様子を交流し、校区の状況を把握するとともに児童生徒理解に努める。 ○6年生を中心の児童の課題や実態について、中学校と交流の場をもつ。	○高学年を中心に、宿泊行事をメインとして中学校区での交流を図ることができた。 ○4校交流会や上野台中学校の先生からの授業などの取り組みも継続して実施できている。 △他校と合同で取り組むことで、学校のねらいに沿った活動に取り組みにくい。	A	